

称号及び氏名	博士（人間科学） 木村 里美
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 31 日
論文名	「生涯にわたる〈学習〉の変容と〈言葉〉の諸相 ——ベイトソンから芭蕉へ」
論文審査委員	主査 吉田 敦彦 副査 西田 芳正 副査 山東 功

論文要旨

本研究の目的は、人間の生涯にわたる学習を自/他の関係性の変容という観点から捉えなおし、その中で獲得され、使用され、生れ出る言葉の諸相を明らかにすることである。

学習は一般に、「有機体が環境との交渉過程で行動や態度を変容し、それが新たな行動の型や態度決定の型になること」と定義されているが、本研究では、有機体にとっての交渉の対象である「環境」を人間に与えられた「所与としての世界」と捉える。そして、この「所与としての世界」を、自己の認識を形作り、時に自己と激しく対立する「他者」という概念と重ね合わせたうえで、このような「他者としての世界」との向き合い方、すなわち自/他の関係性の変容を〈学習〉のプロセスと位置付けて考察する。

「学習」をこのような概念にまで拡張したとき、その射程は自ずと人間の生涯に及ぶものになる。それは所与として自分に与えられた世界、および、人生の途上で遭遇する他者や偶然に訪れる出来事とどう向き合い、どのような主体性を確立していくかを問う学習となる。このような生涯にわたる学習の変容のプロセスを、連続的な右肩上がりの発達概念を超えた次元で描き出すこと、これが本論の第一の課題である。

さらに、人間が世界を認識するための主たる道具は言葉であって、それは必ず他者である人間、あるいは「他者としての世界」との関係性の中で成立してくる。そのような、自/他の関係性の中で成立してくる言葉の諸相を、学習との連関の中で描き出すこと、これを本論の第二の課題とした。

そのためにまず第一部では、現行の学習論を概観し、様々な学習の持つ目的を G.ベイトソンの学習階型論の枠組みを用いて整理し、学習の中で交わされる対話に注目しつつ、第二部での課題となる言葉の働きについての予備的考察を行った。

ベイトソンによると、「学習」とは単に知識を獲得するという営みであるだけでなく、学習者を取り巻くコンテキスト、つまり学習者がおかれた社会の文脈を獲得し、理解し、転換するコミュニケーションのあり方を含み込んだ行為である（以下、この意味での学習を〈学習〉と記す）。そこで、第一章では、従来の学習概念を、人間を取り巻く世界に向き合う態度の獲得というレベルに拡張して整理し、〈学習Ⅰ〉〈学習Ⅱ〉〈学習Ⅲ〉の三階型に分類されることを示した。〈学習Ⅰ〉は試行錯誤による世界との向き合い方の判断基準の学習、〈学習Ⅱ〉は〈学習Ⅰ〉の判断基準の背後にあるコンテキストを読み取り、これを使って事態に効率的に対処していくコンテキストレベルの学習、〈学習Ⅲ〉は〈学習Ⅱ〉のコンテキストが通用しなくなったときに、既存のコンテキストが変容を迫られる学習である。さらに第一章では、ベイトソンの〈学習〉概念に基づき第二章以降の考察を行う際に留意しておきたい発達過程の視点と、個人によるコンテキストの獲得を社会的に構成されたものと捉えるケネス・ガーゲンらによる社会構成主義の視点の二つについて検討した。

つづく第二章では先行する現代の代表的な学習論——ヴィゴツキー、アン・ブラウン、エンゲストローム、フレイレ、ガーゲンや生活綴り方教育、学びの共同体論（佐藤学）など——を考察し、それらを〈学習Ⅱ〉から〈学習Ⅲ〉への変容を目指す学習として、「協同による学習」、「拡張による学習」、「クリティカルな学習」、「ナラティブによる学習」の四つの学習論に類型化した。「協同による学習」は、学習コミュニティ内の対話による学びあいを通じた、共同の意味の構築という学習を示し、「拡張による学習」は、学習の途上で生じる問題をシステムの中に「外在化」し、「システムの矛盾」というコンテキストの中で、関係者による対話を通じてその解決を模索していく学習の概念を示す。さらに、「クリティカルな学習」は、互いの他者性を通して自己内対話へと導かれ、そのことによってそれぞれが所属する「世界」のコンテキストを読み解き、「世界」を自分達の言葉で書き表すためのリテラシーを手に入れていく学習であり、「ナラティブによる学習」は、彼・彼女の物語を語り直すことによって、過去の捕らわれから自らを解放していこうとする学習である。ここでは、特にそれらの学習の中で交わされる対話に焦点化して学習の考察を行った。

そして第三章では、第二章で述べてきた四つの学習を〈学習〉の三階型と関連付けて、〈学習Ⅱ〉から〈学習Ⅲ〉へと向かう方向性を持ったこれらの学習の中で生み出される言葉の役割を考察した。そして、これら〈学習Ⅲ〉へ向けた学習が、共同体としての **meaning** をベースとしながら、与えられた所与と対峙して生み出される個としての **sense** を獲得していく方向性を持つことを述べた。

第二部では個人の生涯の上に生じる〈学習Ⅱ〉から〈学習Ⅲ〉へ至るプロセスを考察し、〈学習Ⅲ〉とはどのような学習であるのかを学習の深まりの中で生まれて来る〈言葉〉の働きに注目しつつ考察した（以下、第一部で明らかにした〈学習〉との関わりで生まれてくる言葉を〈言葉〉と記す）。とくに、〈学習Ⅱ〉から〈学習Ⅲ〉への移行において言葉が既存の日常世界を認識するための「概念」の言葉であることを超え、井筒俊彦の言う

「無分節」の言葉となっていくありさまを、「詩的言語」としての短歌および俳諧の中に見た。

まず第四章では、＜学習Ⅱ＞で獲得した「世界」の認識を問い直す＜言葉＞として J.メジローの自己変容学習論における理性の＜言葉＞を取り上げた。メジローの学習論は成人期の学習論として展開されており、「理性的対話」を用いて、＜学習Ⅱ＞を省察し、新たに主体性を構築していく学習である。他方でそれは、幼少年期の価値観の意識化と、自己を取り巻く他者との関わりの意識化という点で E.H.エリクソンのいう青年期の課題としてのアイデンティティの概念と関連を持つ。そこでこの両者のかかわりについて考察し、自己変容学習論が自己の価値観を相対化することを通して、新しい自己の獲得を目指して行く自/他の分離・独立といった学習という特徴を持ち、それゆえに青年期のアイデンティティ達成の課題に直面する青年のための学習論としての重要な意味を持つことを指摘した。さらに、この自己変容学習論における「理性的対話」の言葉が、幼少期に言葉の習得とともに獲得した社会のコンテクストとしての＜学習Ⅱ＞への省察をもたらす＜言葉＞となることを論証した。

第五章では斎藤茂吉の『赤光』をとりあげ、いったん獲得された言葉が、応答不可能な他者との関係性の中で無力化するありさまを＜学習Ⅱ＞の破綻として位置づけ、それでも語りだそうとするための言葉を模索する＜言葉＞として考察した。茂吉が歌に詠んだような、異質な他者がもたらす変容は、慣れ親しんだ既知の世界との断絶とアイデンティティ崩壊の危機を常に孕んでいる。それは他者との邂逅のみならず、事故や死といった否応ない偶発的な「出来事」としての「他なるもの」との邂逅がもたらす変容であって、個人の連続的な発達や成長といったモデルの中で論じることとはできず、変容の前後に過去と現在との断絶・深淵が存在する。この「他者としての世界」と自己との断絶がもたらす学習を、＜学習Ⅱ＞の破綻と＜学習Ⅲ＞への契機として位置付けて、そこで生じる＜言葉＞の働きと共に考察した。

第六章では、＜学習Ⅱ＞の破綻により言葉が崩壊した後に、井筒俊彦のいう「無分節」から生まれ出る言葉を、松尾芭蕉の俳諧によって考察し、＜学習Ⅲ＞で生じる学習とは何かについて検討した。学習を生涯にわたる所与との向き合い方という実存的な問いのレベルから照射したとき、自己を取り巻く世界からの分離と独立を目標とする西洋的な一直線の発達概念では納まりきれない学習がある。ベイトソンは＜学習Ⅲ＞について「個人的アイデンティティがすべての関係プロセスの中へ溶出した世界」だと述べており、その世界は井筒のいう「無分節」の世界と通じるものがある。この学習の概念を明らかにするために、西平直の「東洋思想と発達研究をつなぐチャート」を手掛かりとして用いた。そして、井筒の「無分節」と「分節」を、東洋思想の表現としての芭蕉俳諧における「虚」と「実」と対照させながら、ベイトソンの言う＜学習Ⅲ＞と芭蕉俳諧が到達した「二重写し」の言葉との関わりについて考察した。

最後に、生涯にわたる学習の中で、自/他一体の「未分節」の状態から、自/他の分離を

経て、自/他融合の「無分節」へと向かい、さらに自/他が自由に往還する「分節Ⅱ」へと関係性が変容していくそのプロセスを、模倣の〈言葉〉から理性の〈言葉〉を経て、二重写しの〈言葉〉へと至る言葉の諸相とともに、学習の三階型と関連づけて捉えて図示した。

以上、ベイトソンの学習階型論を用いて、自/他の関係性の変容という観点から〈学習〉を考察することによって、既存の学習観を超える学習観をベイトソンの〈学習Ⅲ〉の概念の中に捉え、そこへ至る学習のプロセスを示すとともに、生涯にわたる学習の中で自/他の分離のプロセスとしての青年期の学習が持つ意味と重要性を明らかにすることができた。さらに、価値観の破綻の後に人間の学習が辿り着くことのできる〈学習Ⅲ〉の具体相を、芭蕉俳諧が行き着いた二重写しの〈言葉〉の次元をも含めて理解することで、根源的存在次元から日常を照射する「詩的言語」としての短歌や俳句の持つ役割とそれらを学習することの意義を示唆することができた。

学位論文審査結果の要旨

学位申請論文：木村里美著「生涯にわたる〈学習〉の変容と〈言葉〉の諸相——ベイトソンから芭蕉へ」について、本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1) 研究テーマが絞り込まれている

本研究は、多様な学習諸理論を俯瞰、類型化し、それらを生涯にわたる人生の時間軸を射程に入れて整序するという総合化、また、言語学習を国語科教育に限定せず、人間形成にとって言葉のもつ意義を問う根本的な主題化に特色をもつ。したがって研究テーマが対象とする考察範囲は多岐にわたるが、他方、次項の方法論で述べるように、その考察を行う際の参照枠組みはよく絞り込んで限定しており、それによって異なる分野にまたがる研究素材のあいだに一貫した脈絡をつけ、議論の拡散を防ぐことができている。

2) 論文の方法論が明確である

本論文は、主として次の二つの考察枠組みを用いて諸々の関連文献を解釈し、それらを大きな見取り図のなかにマッピングして、課題（生涯にわたる言葉の学習プロセス）に関する一つの理論モデルを提案するという方法論をとっている。第一の参照枠組みは、文化人類学者G. ベイトソンによる、近代学校の制度化された学習理解の枠組みを拡張する「学習とコミュニケーションの階型論」である。第一部の三つの章ではこれに基づいて先行する学習諸理論を概観し、とくに「学習Ⅱ」から「学習Ⅲ」に向かう学習での対話や意味の生成といった言語活動に考察を焦点づけている。第二の解釈枠組みは、井筒俊彦の言語哲学を踏まえて西平直が定式化した「東洋思想と発達研究をつなぐチャート」である。第Ⅱ部では、この枠組みを用いて、通常の近代教育学の言説ではその相貌を記述するのが困難な「学習Ⅱ」から「学習Ⅲ」への断絶や飛躍、そして「学習Ⅲ」における究極の境地を、斎藤茂吉や松尾芭蕉の作品のなかに見出している。選定された参照枠組み、考察対象ともに必然性があり、方法論は明確である。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている

先行する学習諸理論に関しては、とくに第2章において、ヴィゴツキー、アン・ブラウン、エンゲストローム、パウロ・フレイレ、ガーゲンといった多岐にわたる現代の代表的なそれを調査し、生活綴り方教育や学びの共同体論（佐藤学）といった日本の教育実践を絡めながら、的確に要約し整理している。第Ⅱ部での、生涯学習論に関わる先行研究はエリクソンの生涯発達論とメジローの自己変容論への言及にとどまるが、「学習Ⅲ」レベルの変容を主題とする生涯学習論としては、それ以上の先行研究がないため十分である。なお本研究では、西平の教育人間学研究のフレームに基づく解釈に限定しており、文学分野と

は異なる研究上の立場から斎藤茂吉や松尾芭蕉の詩歌・俳諧への論及を行っている。以上より、本研究の課題設定にとっては十分な先行研究のレビューがなされている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

研究の主たる素材となった学習諸理論について、それらのエッセンスとなる特質を概括し、4つの独自に導入した概念を用いて、総合的な吟味・考察を行っている。第Ⅱ部の斎藤茂吉や松尾芭蕉の作品については、教育哲学分野では定評のある西平直の枠組みを援用して精緻な解釈を加えている。以上より、本論の研究デザインにとって基本となる文献資料については、十分な吟味が行われている。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

本研究は、結論的に、「自/他関係の変容と学習の三階型に対応した言葉の諸相」という生涯にわたる言語学習のオリジナルな理解モデルを提案している。そのもつ独創的な意義として、次の三点を指摘できる。

- (1) ベイトソンの〈学習Ⅲ〉の究極ステージを芭蕉俳諧の世界に看取することによって、人間が言葉を習得する生涯にわたる学習プロセスの最深の位相を明らかにしたこと。
- (2) 生涯にわたって経験や知識を蓄積・拡大していく従来の近代的発達モデルに基づく生涯学習論に対して、人生において出会われる関係性の破綻や断絶や組換えを含みこんだ変容型の生涯学習理解の一つのモデルを提示しえたこと。
- (3) そのような生涯プロセスを視野に入れることによって、従来の国語科教育論の知見を超えて、青年期という限定した時期における言語習得の課題——共同の意味の生成、批判的リテラシー、ナラティブな語り直しなど——を浮き彫りにしえたこと。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている

上述のとおり、研究素材を十分に吟味して論拠を明示し、論脈に一貫性をもたせるために必要な参照枠組みに基づいた議論が展開されている。とくに結章において、本論六つの全ての章での議論を集約し、学習Ⅰ～Ⅲに対応させて、自他の同化、分化、分離、融合、往来という自/他関係の変容プロセスと、模倣の言葉、概念の言葉、理性の言葉、言葉の喪失、二重写しの言葉という言葉の諸相との関連をダイナミックに結論づけているのは、十分な総合的考察となっている。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

述べてきたように、本研究は、教育学の、生涯学習論と言語学習論の分野における新たな地平を開拓した、独創性を備えた論文である。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員が一致して、本論文を博士（人間科学）

学位の授与に値するものと判断した。